



4 旅は道連れ世は情け

「お前……いまなにをした？」

草乃が警戒するように、じつとわたしをにらむ。

「わ、わかんない！ ごほつ、ページが剣みたになっただけ……けほつ、もう紙にもどってる。」

なぜか、のどが熱くて痛い。めちやくちや熱いとうふを食ったあとみたいだ。

「は？ 意味わかんねえ。」

いまの力は、なんだったんだろう？

心臓が波うって、手がふるえてる。

「とにかく、まじめ優等生、礼は言わないからな！」

草乃はぶいっと視線をそらし、巨大なツノをもつヘラジカを、ひらりとよけた。

わたしは、まだふるえる手でページを本にもどした。

「なんか、文字がうすくなつてる？」

のどをさすれば、痛みと熱はゆつくりと引いていった。

「そうだ、いいこと思いついた！」

とつぜん、ひらめいたように、草乃がくるつと方向を変えて走りだした。

その口元に、ふてきな笑み。

その先に、玉照。

「巫女お嬢、お前も道連れにしてやる！ おれのジャマになるヤツは、早めに退場しても

らうぜ！」

玉照を巻きこむ気だ！

「ちよつと、命をうばう行動は禁止されてるよ！」

そうさけばば、草乃は鼻で笑った。

「おれが直接たおすんじゃない。動物が襲えば、命をうばう行為が、じゃないだろ？」

「救いようのない人ね！」

荷物をかかえなおした玉照が、顔をしかめる。

「玉照さん、逃げて！」

ちらりとわたしを見た玉照は、コクツとうなずくと、まっすぐこっちに走ってきた。

「いや、こっちには来ないで！」

「理不尽をこうむるなら、ライバルを道連れにする。それがわたくしの流儀よ！」

ここまでどうどうと言いつつ切られると、いつそすがすがしい。

でも、かんべんしてほしい。

「わたくし、旅は道連れ世は情け」という言葉が好きなの。世の中を生きていくためには、人々が協力して助け合うことが大切だという意味よ。わたくしたちも、助け合いましょう。」

「ただ道連れにしてるだけじゃん！ 情け（思いやり）がない！ ちよ、来ないで！」

草乃と玉照は、かなり足が速い。

全力でうでをふって、力の限り走っても、もうわたしの背後まで来ている。

ガールルツ ガウガウツ 背後から、猛獣たちの荒い息が聞こえる。

「ひいひい！ 帰りたい、いますぐ帰りたい！」

草乃がとなりにならんだ。ふと、その手ににぎられている剣が、目にとまった。

「草乃くん！ 剣を使いなよ！」

「剣……たしかに、これでお前みたいに獣を八つ裂きにできるかもしれない！」

草乃が、くるつとふり返って、剣をかまえた。

「なるほど、イメージがわいてきた！」

スツと息をすいこみ、カツと目を見開いて。

「草薙の剣よ、力をかせ！」

草乃がいきおいよく剣をふりぬいた刹那——

ザンツ たった一撃で猛獣たちの半数が、真っ二つになった。

ゴリラの口からは、もくもくと綿ぼこりがこぼれだし。

チーターからは金属のバネがとびだしている。

床には、バラバラにくだけた木の芯がころがって、おもちゃ箱をひっくり返したような

状態になっていた。

「す、すごい！」



「草薙の剣は、神話にでてくるような力を持つているのね！」

両手を合わせた玉照が、感嘆の声を上げたとき。

「いつてえ！」

顔をしかめた草乃が、剣をもった手をさすった。

「反動がやばい。しばらくは使えない……。」

わたしのときは、のどが痛いくらいで、ひどい反動はなかった。

さっきの不思議な力は、特別な条件で出せるものだったのかな？

「アッハハ！ 楽しくなってきたな、命。」

そばにやってきた大和がくつたくのなない笑みを浮かべる。

「大和、さっきのページの力について、なにか知ってる？」

「いや、なんもわかんないぜ！」

無邪気にニカツと笑う大和は、うれしそうにわたしののど元を見てる。

「たまたま、大和がわたしの口にページをつつこんだの？」

「そうだぜ！」

……でも、たしかにあのとき、大和は「楽しめよ。」って言った。

「ここで納得するほど、わたしは頭が悪くないよ。」

じつと見つめれば、大和はきよとんと首をかしげる。

「命は、けっこう頭が悪いと思うぞ！」

「はあ？」

くつきり二重になるくらい、大和をにらみつけてやった。

「アハハッ そんなことより、まずはここから逃げ切らないとな！」

斬撃をまぬがれた動物たちが、うなり声を上げて走ってくる。

「これ以上、こんな部屋にいられるか！」

わたしたちを追いぬいた草乃が、出入口の扉にたどりついた。

扉の前には、八夜が立ちはだかっている。

「……剣を渡せば、通すよ。」

小さな声だったけど、その手はしっかりとドアノブをつかんでいる。

「ふざけんな！ 渡すわけないだろ！」

八夜は大きく息をすつて、勇気をふりしぼるように言った。

「ぼくは……きみを勝たせたくない。」

八夜の意見には、おおむね賛成だ。でも——

「草乃くんが通らないと、わたしたちも通れないよ！」

八夜ツクヨさん。わたくしだけでも、先に通してくださいませんか？」

玉照の言葉に、八夜ははつきりと首を横にふった。

「草乃が剣を渡すまで、だれも通さない。通りたかったら協力して。」

「かしこい！ でも、まきこまないで！」

天をおおぐわたしの横で、大和は楽しそうに笑っていた。

「どけ！ おれは一刻も早く、この部屋を出たいんだ！」

「それなら、剣を渡して！」

「だれが渡すか！」

草乃が言い放った瞬間——

八夜の表情が、ふっと、冷酷なものに変わった。

と、気づいたときには、目にもとまらぬ速さで、八夜が剣をつかんでいた。
一瞬のできごとに、目も思考も追いつかなかつた。

「なっ!? ヒヨロガリゲーマー、返せ!」

草乃が剣をとり返そうと、八夜をおしたおす。

「いやだ! ぼくも勝ちたい!」

両手で剣の柄をにぎって、かたくなにはなさない八夜。

二人は床にころがり、おし合いへし合い。互いの顔を手でおし合い、大きなリュックやカバンをバタバタとぶつけながら、剣をとりあつてる。

どれだけ草乃にどなられても、八夜は引かない。

おとなしそうに見えて、けっこう度胸があるみたいだ。

「このままじゃ、二人ともケガするよ!」

でも、二人のあいだにとびこむのは、得策じゃない。

そのとき――

ウキキーツ とつぜん、高い声がひびいて、目の前を黒いかげが横切つた。

まばたきをしたときには、二人の手に、劍はなかつた。

「えっ!?」

ウキツ 高い声にふりむけば――

「サル!？」

その手に、劍がにぎられていた。

サルの丸いひとみが、ニヤツと細められる。

「あれは、コモンリスザルっていつて、好奇心いっぱいの、いたずら好きのサルだぜ！」

「いまは説明はいらないよ！」

楽しそうに劍をかかえたサルは、器用に扉の取っ手をひねると。

そのままろうかを走っていった。

「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」